

〈2〉ウクライナのレアアース資源の実態

一般社団法人 ROTOBO ロシア NIS 経済研究所 研究員 渡邊 光太郎

2025年2月、米国がウクライナにレアアース資源の権益を要求した。政治的・倫理的妥当性もさることながら、ウクライナではレアアースの採掘実績はない。旧ソ連圏特有の“夢”を真に受けたものと筆者は判断したが、米国政府ともあろうものがそんなのを真に受けるとは思わなかった。

結論としてはウクライナのレアアース資源は、ウソでしかない。ウクライナでもそれらしい地位にいる人が、ウクライナにレアアース資源が存在しているかのような発言をしている。実際、公式にはウクライナにレアアース資源があることになっており、開発を予定する対象にもなっている（あくまでも予定で実行はされない）。ウソであっても、旧ソ連圏の様々な実情に縁がない場合、真に受けてしまっても無理もないところもある。正しい実態の解明は一定の需要があろう。筆者としては「そんなのいつものアレに決まってるじゃん」でしかないのだが、本稿ではウクライナのレアアース資源の実態について述べる。なお、どちらかというとも米国が“ウクライナに世界の3分の1のレアアース資源”とのウソを真に受けた事実こそ意外である。本稿では扱わないが、米国政府がちゃんと機能しているかについての検証が必要に思う。

その後、ロシアが自国のレアアース資源の共同開発を米国に提案した。ロシアがウクライナよりレアアース資源に恵まれているというのは事実であるが、こちらも“夢”を膨らませ過ぎていることは同

様である。ロシアのレアアース資源については、ロシア政府の語るほどの規模ではないが、微小ながら実態がある。別途紹介したい。

ウクライナのレアアース資源の第一印象

筆者は金属業界と縁があり、旧ソ連圏の金属資源や金属精錬の事情について一定のリテラシーがある状態である。すべての金属ではないが、いくつかの現場は見ており、地質分野の専門家とも付き合いがあった。なので、筆者にとっては、旧ソ連の金属資源では、いかにも存在しそうなものと、存在しそうなものくらいの峻別はできるつもりだ。

その状態でウクライナのレアアースと聞いた第一印象は、「ウソに決まってるじゃん」でしかなかった。確かに、ウクライナのいかにも公式そうな情報でもレアアース資源の存在があることになっているし、天下のアメリカ政府も真に受けているのである。現在の米国政府がどれだけまともに機能しているかという議論はさておき、常識的にはこうした公的な組織が堂々と言っていることは、ウソではないと思うのが普通である。しかし、旧ソ連圏はこうした常識が必ずしも通用する地域ではないのである。

実際のウクライナでのレアアース資源を思わせる具体的情報のなさ、博物館等で展示される鉱物、他の資源との比較等から考え、ウクライナにレアアース資源がありそうに見えないのである。旧ソ連でい

かにもなさそうなものの存在が語られた場合、まずウソであるとの推測をせざるを得ない。

旧ソ連圏では、その合理性や必要性がない場合でも、粉飾した情報を大々的に流す場合が少なくない。公的機関に限らず、民間企業でもそうしたことがある。これは必ずしも騙す意図があつてのことではない。ある種の慣習なのである。いかにも正しい情報を出しそうな地位にいても同じなのである。

例えば、ウクライナ地質調査所の元所長の記事などそうしたものだろう (<https://www.mining.com/ukraine-and-us-partner-in-critical-minerals-sector/>)。これを読むと、ウクライナの金属資源にはいかにも可能性がありそうに感じてしまうかもしれないが、明らかウソまで入っている。例えば、アルミ製錬の能力があることになっているが、過去5年のアルミ製錬の実績はゼロだし、工場には製錬設備が残っていないと報道されている。確かに、開戦までウクライナでスポンジチタンは作られているが、航空宇宙用途では使えないものと見なされている。確かにリチウム鉱床があり探査はされているが、ヨーロッパそのものがリチウム資源の豊富な地域ではないため、ヨーロッパの3分の1の埋蔵量が本当にあったところで、それが何か意味を持つわけではない。ウクライナのリチウム鉱床はペグマタイト鉱床で、仮に生産にこぎつけたとしても、南米の含水鉱床と比べれば小さい存在にしかならない。いかにもベリリウム資源の開発が進むような書かれ方だが、統計上、ウクライナからのベリリウム鉱石供給などどこにも確認できない。何十年も前からベルジャンスクのベリリウム鉱床は知られていたが、具体的に何か進んだことは一度もなかったと見られる。ベリリウムは需要が知れている金属であるが、USGSによるとカザフスタンに鉱石の備蓄があり、米国の特殊な鉱石が安価に採掘可能であったりするので、常識的にはよほど競争力がないとウクライナの出番があるとは思えない。書かれている内容から得るであろう印象と、実態は大きく異なる。

いかにも多くの金属資源や金属精錬能力があるような書き方だが、開戦前の時点で生産実績があつたのは、チタン鉱石、スポンジチタン、ジルコニウム鉱石、マンガン鉱石、フェロマンガ、フェロシリコマンガ、フェロニッケル、鉄鉱石、鉄鋼製品、ウラン鉱石だけである。この内、ウラン鉱石の採掘

は戦争と関係ない理由で消えている。チタン鉱石、ジルコニウム鉱石、マンガン鉱石、鉄鉱石と関係の深そうなものであれば、確かに商業化し得る場合もあるかもしれない。しかし、実際に採掘に至るようなレアアース鉱床は、この顔ぶれの鉱石とは関連性が低いのである（複雑なので後述する）。

誤解するべきではないのは、ウクライナも含め決して一概に低レベルと言えないことである。夢ではなく、現実を冷静に分析する高い専門性を持つ人材もいるのである。筆者の語学力ではとても完全な理解はできないものの、ウクライナ科学アカデミー地質研究所地質研究部長へのインタビュー記事では、ウクライナの金属資源、金属産業の状況が現実を含めよく説明されているように見える (<https://tsn.ua/exclusive/ridkisnozemelni-metali-ukrayini-chi-mogla-rosiya-napasti-cherez-nih-i-scho-mozhut-otrimati-amerikanci-2762019.html>)。言わば、実態を暴露しているのである。旧ソ連では夢が溢れる片腹痛い公式情報が垂れ流される一方、こうした冷静な現実の分析も誰かがしている場合も少なくない。そして、その分析は要点を突いていて正確である場合が多い。なんでこっちを出さないのかが不思議で仕方ない。

旧ソ連圏では、資源の実態を粉飾しさも有望かのように語ることは少なくない。ウクライナにレアアース資源の存在を推定させるような情報がない中、ウクライナに世界のレアアース資源の3分の1と聞くと、いつもの夢の中にしか存在しない資源がまた現れたとしか思えなくなっている。

ウクライナの金属資源概要

以前、今年の初めに本誌において、ウクライナのチタン産業について紹介した際、ウクライナの金属資源について紹介した。この短期間で同じ内容を書くのは恐縮なので、詳細はそちらに譲るが、概略のみは述べておく。

端的に言うと、ウクライナは金属資源大国ではない。ウクライナで経済的に採掘できる金属は少なく、採掘されている金属でも採掘量の世界シェアは1桁に留まる。これは戦争開始前の話であり、開戦後はそこから生産量が激減している。

現時点でウクライナに資源が現存すると言える金属は、鉄、マンガ、チタン、ジルコニウムのみで

ある（ジルコニウムはチタンに随伴するもので、以下では省略する）。これらの採掘も戦争によって妨害されているものの、マンガンを除いては、数量を減らしつつも戦時下でも継続的に採掘されている。また、マンガン鉱石の採掘も状況が平穏になれば復活するものと思われる。

しかし、開戦前の時点で、ウクライナの鉄鉱石の採掘量はオーストラリアの10分の1以下、マンガン鉱石の採掘量は南アフリカの10分の1以下、比較的規模が大きいチタン鉱石の採掘量も世界シェアは5～7%に過ぎない。決して、ウクライナの資源が市場に大きな影響力を持つわけではない。ロシアのニッケルや白金族の資源とはレベルが異なるのだ。

世界トップレベルの貧資源国である我が国と比べれば、経済的に採掘できる資源が複数存在するだけでも仰ぎ見るような豊かな資源に見えてしまう。しかし、南アフリカ、ブラジル、オーストラリア、ロシア等の正真正銘の金属資源大国と比較すれば、ウクライナの金属資源は霞んでしまう存在である。金属資源に一定のリテラシーがあれば、公開情報からウクライナの金属資源の実態はすぐに分かる。

なお、開戦時、ウクライナではウランの採掘も行われていた。こちらは、戦争がなくても2020年代の枯渇が予想されていたようだ。戦争終了後も復活する可能性は少ない。採掘されていた鉱床は、カザフスタンにあるようなインシチュ・リーチングで安価に採掘できるタイプの鉱床ではない。仮に今後、探査が行われてもウクライナがウラン資源大国になる

可能性はないと見るべきである。

ウクライナでは、過去、ニッケル、アンチモン、水銀、アルミニウムが採掘された実績がある。現在、採掘が行われていない理由は、ストレートに資源が枯渇したか、そもそも経済性が低い鉱床だったからである。

結論としては、ウクライナには鉄、マンガン、チタン（チタン鉱石のオマケのジルコニウムを含む）しか、金属資源と言えるものは存在しない(図表1)。

ウクライナの新規鉱床開発の可能性

現状、鉄、マンガン、チタンしか金属資源がないとして、今後、全く新しい鉱床が発見されたり、未開発の鉱床が開発されたりする可能性はあるのだろうか？

結論から言うと、そうした可能性は極めて低い。極めて低いと書くと少しはあるのかと誤解する人が現れるかもしれないが、単に世の中では何があるか分からないから“絶対はない”という言葉を避けているだけで、宝くじで一等に当たる可能性と同レベルと理解していただきたい。仮にウクライナで新たに鉱床が見つかるのであれば、鉄、マンガン、チタンの鉱床だけだろう。ウランは前述のとおりだが、ウラン以外の過去に採掘実績のある金属の鉱床も恐らく新規開発はないだろう。既に十分にウクライナの資源は探査済みであり、探しつくされた状態であるからだ。

図表 1-1 ウクライナ代表的金属資源 鉄鉱石



図表 1-2 ウクライナ代表的金属資源 チタン鉱石

